土石流に埋もれた久光島

佐藤　暁

一、久光の消滅

豊後國速見郡朝見庄には、中世三つの名があった。『宇佐大鏡』によると、宇佐宮へ宮召物加地子を納めた朝見庄の名は末松、倉光、節丸であった。また、大永十年（一二七三）三月、石垣庄の地頭代迎西と大隅國正八幡大神使との諍いでは、訴訟にあたって、朝見庄の弁分、久光、藤花、末松の各名から六人の百姓が証人として呼び出されている。以上のことから、朝見庄には弁分、末松、藤花、倉光、節丸、久光の六名があったことがわかる。

この内、弁分は「びゆう、べぶ、ぶんぶ、べっぶ」なと読み、今日の別府の地名の元となった。後の五つの地については、現在のどこかはっきりしない。ただ久光名については、慶長十九年（一六一四）三月十五日に作られた『速見郡横灘慶長七年川成改年記定開帳』（松井文書）の「別府村」の冊のなかに、次のように記入されている。

一、中田　廿六間
八　間　六畝廿八歩　三年御免　久光甚五郎

この記録は、当時、速見郡を領有していた細川忠興の代官松井康之が作成したものである。このことから、慶長十九年頃まで、別府村の内に久光の地名が残っていたことがわかる。

久光村の消滅については、三つの資料がある

(一)、その一は、『豊陽古事談』の慶長三年七月の項に、

（慶長三年七月）廿九日、大雨、速見郡鶴見嶽崩る。麓の深渕を潰し落ち、渕を埋ること半を過ぐ。是の故

に忽ち溢れ出、其水は急流と成りて海に入る。時に速見郡朝見荘久光村流没す。人畜の死亡する者四百余人或は溺死する者、凡そ四十余人と。（原文漢文）とある。

(二)、第二の資料は、天保五年（一八三四）に杵築の是永亀由（六雅）が編纂した『豊城世譜』の記載である。

（慶長三年七月）廿九月、大雨甚し、鶴見岳東北の麓の深渕、大いに倍し、又山頭崩れ落（おち）、其深渕を埋る事半分。渕水溢れ出、大河急流し海に入る。時に速見郡朝見庄久光村流没す。死する者四十余人也。

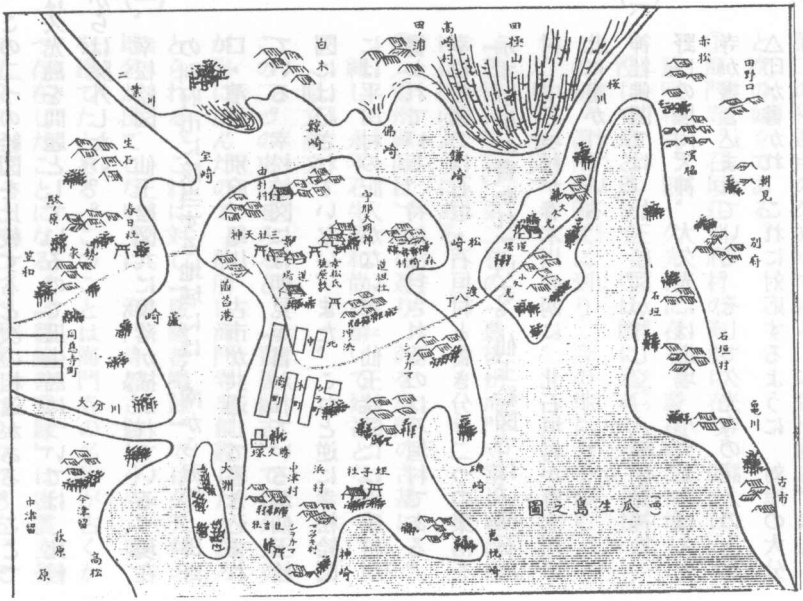
(三)、第三の資料は、別府市朝見の禪利萬年山長松寺の第十三世舜堂仙玉和尚が、安政三年（一八五六）に編述した『瓜生島・久光島之考並地図』（豊陽古事談所収）である。

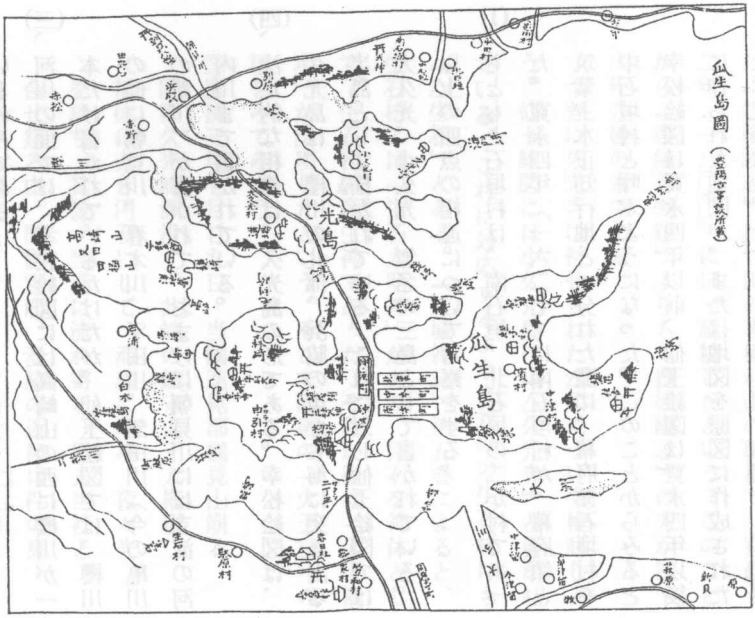
（慶長）二年丁酉九月廿五日豊府旧記に曰。慶長三年七月七日より大雨、廿九日まで。鶴見岳東北の澗（たに）より水溢れ出て、近村山里大河の如し、此時久光両村流没す。死者四十余人。

以上三つの記録を総合すると、慶長三年（一五九八）七月二十五日より二十九日まで大雨が降り続いた。この大雨で、鶴見渓谷にあった湖水は増水した。そこへ鶴見岳で起った「地すべり」が流れ込んだ。その結果、湖水の壁は破れ一大土石流となって久光村を襲ったというのである。このような「山潮（やまじお）」は『別府史談』創刊号で入江秀利氏が『諸用留・家宝珍事記』のなかで　享保十四年（一七二九）九月、寛政十二年（一八〇〇）六月、天保九年（一八三八）七月の例を発表されている。これらの洪水と性格を一にするものであった。

二、二つの絵図

現在、久光村については、「久光島」の地名で二枚の絵図が残されている。一つは『豊國小史』や『大分県郷土資料聚成』（地誌編）に載せられている幸松絵図（仮称）である。この図は府内（大分）の商家幸松家から発見されたという。いま一つは。朝見の長松寺の仙玉和尚の著書『瓜生島・久光島之考並地図』に収められた絵図（仮称仙玉絵図）である。


瓜生島之圖
二茅川
白木
田浦
高崎村
四極山
桜川
赤松
田野口
鎌崎
偶崎
鎌崎
生石
至崎
春日社
芝和
蓮崎
同慈寺町
大分川
大洲
今津留
中津留
高松
石垣村
亀川
方南


瓜生島圖
光島
瓜生島
水系

この二つの絵図を比較すると次の相違がある。ここでは久光島を問題としているので瓜生島については、比較からは除外したい。

(一)、幸松絵図　仙玉絵図共に集落が描かれている。現在の別府市に該当する地域には、南から赤松、田野口・濱浜、別府、亀川、古市が共通して書き込まれている。幸松絵図には朝見が書かれているが仙玉絵図には記されていない。また、これと逆に幸松絵図には平田村の記入がないが、仙玉絵図には平田村が書かれている。特に注目されるのは石垣村である。幸松絵図では石垣・石垣村と書き分け二つの集落を示す屋根が書かれている。仙玉絵図では、南石垣村、中石垣村が春木川の南に、北石垣村が春木川の北に書かれている。

(二)、神社佛閣では、仙玉絵図が詳しく、八幡朝見神社、野口の境川天神、大久光には道場、小久光には久光寺が書き込まれている。そして久光寺の記入の上に△印が書かれ、これに対応するように　対岸の大分の生石村にも『△生石』の記入がある。これに対し幸松絵図は大久光と小久光との間に道場が書かれているのみである。

(三)、河川の面では、幸松絵図には高崎山の西に櫻川が一本だけ書かれているだけだが、仙玉絵図では、櫻川の他に朝見川、春木川、平田川、無田川（今の亀川の新川）が書かれて、おまけに朝見川には支流の河内川まで書かれている。

(四)、決定的な相違は、久光島の形である。幸松絵図は、久光島は、櫻川の北部、浜脇の東から海に突き出る半島として描かれている。これに対し仙玉絵図では大久光、小久光、無名の三島として書かれている。

以上の四点の相違について考察をする。

(1)、もともと石垣村は、南石垣、北石垣の二か村であった。寛永四年（一六二七）に南石垣村が、幕府領と筑紫主水正知行地とに分れた際に、幕府領石垣村を中石垣村と呼ぶようになった。このことからみると幸松絵図は寛永四年以前、仙玉絵図は寛永四年以後に作られた地図が、または地図を原図に作成されたと考えられる。

(2)、第二の相違点の久光寺である。『豊後國志』によると次の如くである。

①海門寺。石垣荘別府村の海浜に在り。開山は慧明和尚。旧、久光村に在り。慶長の災に地没して海と爲りて、寺は既に鳥有たり。元禄の初、雷州禪師此に到り、今の地に寺を創む。

（原文漢文）

『豊鐘善鳴録』第二巻の「豊後州海門寺雷州禪師伝には次のようにある。

②（雷州禪師は）豊に還り、茆を海門の古基に縛し、永平石牛梁和尚に請いて始祖となす。

（原文漢文）

この二つの史料をみると、『豊後國志』では久光寺が海に沈んだので、他所に海門寺を創設したと讀みとられる。これに対し『豊鐘善鳴録』では久光村の地名が出てこない上に、海門寺の古跡に小寺（茆）を建てたとある。このことは海門寺の名称が古くかつ存在したことになる。『豊鐘善鳴録』は密雲玄契が寛保二年（一七四二）に著述したものである。また『豊後國志』は竹田の唐橋君山の編纂で、寛政十二年（一八〇〇）にほゞ脱稿したという。このことから『豊鐘善鳴録』よりも『豊後國志』の方が四十八年の後の本である。

つぎに久光寺に付せられた△印について検討しよう。仙玉絵図には小久光島に『△久光寺』と書かれている。これに対応するように対岸の生石村にも『△生石』とある。『雉城雑誌』第五巻によると、生石村には「生石大明神」があり、巨石を神体として、生石村の産生神であった。それが後に「火王権現」が出現したという。そこで同書の「火王宮」の項をみてみよう。

③慶長三年七月廿九日、当國速見郡鶴見山崩る同郡久光嶋漂没す。此嶋の鎮守火王大権現、神体は赤き円石にして、海底に沈み、夜々光を放ち、其後、当浦に流れ寄る。里人当社と合せ祭る由。同郡別府、浜脇の近邑に件の島より出たる里民苗裔ありて、当社を生土神として祭る由聞ける。此説、久満[26]島の遺民の家

家伝へたる由なれど、由原山に其説なし、疑ふべし。

この史料によると、仙玉絵図の久光寺と生石の△印は、明らかにかつて久光島の鎮守であった火王権現をあらわすものといえよう。

(3)、(三)の河川、(四)の久光島の形を合せて考えてみたい。

幸松絵図では、久光島は半島である。半島の西は深く湾入して、その奥に浜脇村がある。この絵図をみると浜脇村は天然の良港といえよう。かつて別府市温水（ぬくみ）（関の江海岸の奥や竈門では、砂州が北にのびて、自然の防波堤となって、中世までは港を形成していた。それを近世になると、川がはこんだ土砂の堆積と、農民の不断の開拓によって水田化されてくる。大字竈門の温水の北新田、大新田。国立病院東の中無田、原無田などは近世に水田化したところである。このような水田化しやすい浅い内海でも、大形船の普及していなかった中世では良港として充分役に立った。しかし五百石積、千石積の大形船が発達普及する中世末から近世にかけては、浅い入江は港の役を失ってくる。浜脇村が港として登場するのは、建久七年（一一九六）に豊前豊後の守護となった大友能直が浜脇浦に上陸したとされるときからである。また慶長五年（一六〇〇）九月大友吉統が、石垣原合戦の前に浜脇浦に上陸している。このように奇（く）しくも浜脇浦は、大友氏の興亡に関係している。

以上のことから幸松絵図では、浜脇浦に河口を持つ朝見川さえも書かれず、それ以外の河川も記入がないところをみると、幸松絵図の原図となったのは、府内を中心とする絵図か、浜脇が良港であることを記した絵図と考えられる。これに反して仙玉絵図は、久光島は三つの島として書かれている。その上、河川の朝見、春木川、平田川など詳細である。これは浜脇浦が港としての機能が減少した時期、横灘（別府）地方を中心に書かれた地図が原図となったと考えられよう。

以上三点を総合して考えると幸松絵図の成立は、仙玉絵図よりも古いこと。さらに仙玉絵図は『豊後國誌』や

『雉城雑誌』の影響をうけていること。さらに絵図作成の意は府内（大分）地方、つまり瓜生島にあると考えられる点である。こゝで『雉城雑誌』の成立を見ると、天保年間の頃に府内藩の学者阿部淡斎が豊府指南、豊府聞書、豊府雑誌、豊後國志等を基に記述したという。

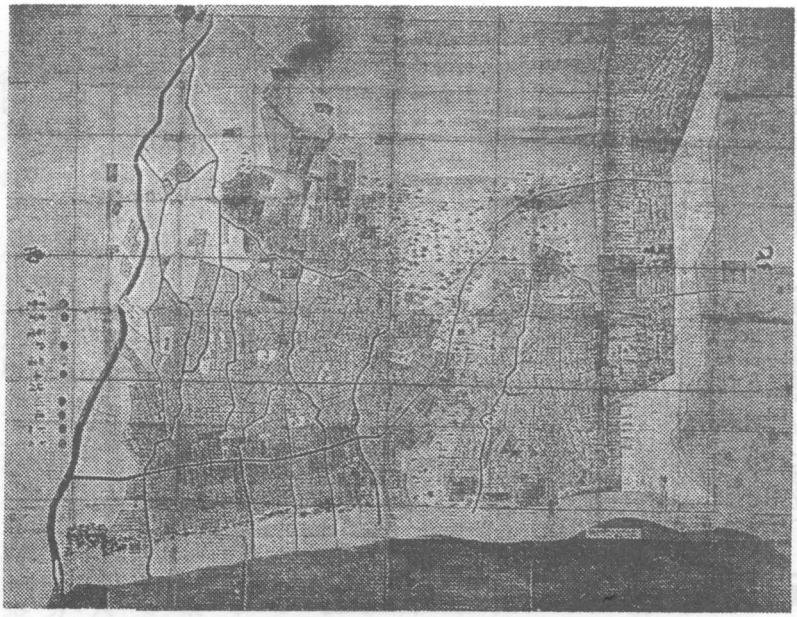
さてつぎに、久光村が滅亡したのは、海底に沈没したためだと言われている。これを検討するために次の表を見てみよう。

史料（書名）	著者	著作年代 日本紀年	著作年代 西暦	久光の名称	滅亡の状況	備考
豊鐘善鳴録	密雲玄契	寛保二年	一七四二	記入なし	記入なし	
豊陽古事談	不明	宝暦十年より以前？	一七五三より以前？	久光村	流没	
豊後国志	唐橋君山	寛政十二年	一八〇〇	久光村	没し海となる	速見郡海門寺の項
豊城世譜	是永亀由	天保五年	一八三四	久光村	流没	
雉城雑誌	阿部淡斎	天保年間？	一八三〇～四四？	久光島	漂没	
瓜生島・久光島考	長松寺仙玉	安政三年	一八五六	久光島 久光両村	流没	久光両村は大久光・小久光

この表によると『豊陽古事談』『豊城世譜』『瓜生島久光島考』が「流没」。『雉城雑誌』が「漂没」。『豊後國志』が「没し海となる」としている。『豊鐘善鳴録』は村名、滅亡の状況が書かれていないので検討の対照からはぶこう。さて、注意すべきことは『豊後國志』以外の諸本は総て山潮による流没、漂没である。このことから流されたのは村の家、没したのは土地。漂ったのは流された家屋と考えられよう。このことを明らかにするために考察を続けたい。

三、延享の別府村絵図

別府市立図書館に三枚の村絵図が保存されている。延享五年（一七四八）二月に作られた『浜脇・田野口村絵図』と、ほゞ同じ頃と考えられた『別府村絵図』『立石村絵図』である。このうち『立石村絵図』を見ると、現在の板の平、堀田、南立石、中津留など、朝見川断層下の平地は、ことごとく川原を示す白点で埋められている。かつては水田、畑地、屋敷であったことを示す区劃の上にも、一面に白点が打ちこまれている。これは絵図が作られた時は田畑、屋敷であった所が、その後の洪水（土石流）で河原となったことを示している。この河原



は『別府村絵図』に続いている。つまり別府村の北の堺河原（現在の境川）とつながっている。そして別府村では、境川に沿って野口の境川天神を中心に下は日豊線の線路附近まで、上は青山中学校ふきん附近まで町筋の上にも白点が打ち込まれている。詳細に検討したい方は『別府市誌』第五編の頭部にカラーでおされてあるので参照されたい。中石垣村の首藤惣右衛門が書いた『家宝珍事記』などでは、境川の名称は使用されていない。上流は「河原の奥」、下流は「堺河原」と呼んでいる。明確に「境川」の名が使用されるのは、明治十八年に完成した『豊後国速見郡村誌』からである。

荒金呉石（市郎兵衛）の手記である『諸用留』によると、天保九年（一八三八）七月二十一日。安政二年（一八五五）七月二十九日に大洪水が起った。安政二年七月二十八日に「雷鳴有、終日大雨降。風は格別なし」とある。ところがこの大雨によって「鳥井峠より下る両方の山、図のごとく大崩れ、皆々朝見川に出る。よって大洪水となりしなるべし」と書かれている。そして、その模様を絵図に書き留めている（第四図）。これによると現

在の別府ロープウェイ高原駅から見返り坂の間の谷である。この谷に向かって鶴見岳から二か所の「地すべり」が起きていて「此所、大切なり」と書きこまれている。また谷の反対側の船原山の傾面にも、四か所の「地すべり」が書きこまれている。

地形的に見ると、見返り坂の上手は、西側から山が迫って狭谷となっている。ここに「地すべり」の土砂が崩れ落ち、谷口を寒いで一種のダムとなった。それが大雨によって鶴見岳、鳥井峠、船原山に降った雨水が湛えられ、それが二十九日の夜、一時に決壊し東に奔流したと考えられる。

現在の南立石生目町の生目神社附近では、境川と板地川の隔りは二百五十メートル。板地川と朝見川の間隔は四百メートルほどである。見返り坂で発生した土石流は、生目神社附近で、この三本の川に沿って別府湾に奔流となって流れ込んだと考えられよう。この土石流の性態は慶長三年の久光村を襲った土石流と似ていると考えられよう。

この安政二年の洪水の被害について、荒金呉石は『諸用留』につぎのように書き残している。

南町本家茯やヨリ南之分、川筋ハ申ニ不及、先田地上ミの方、家の上迄大石入白河原なり、夫ヨリ家々ニ砂をし込み、町うらも、家の門も戸も壁もセリ上リ崩し大石入、町は極々高く相成しバらく通路止る、南は大川に相成、家を掘出スも有之、夫ヨリ南松原邊田地石砂入、大水ハ浜邊の屋敷にせがれ、水はきかねて、楠湯大潰レ、アノ邊大損ジ江の内ニせり込、南ハ永石川の尻大破ニ而、川巾廣く相成。

このような土石流の被害をみると、鶴見渓谷にあった湖水の決壊によると考えられる慶長三年の「山潮」は、さらに大きい被害であったと想像される。

昭和五十六年、別府駅裏通りに面した別府公園の東角に、一群の五輪塔が発見された。この埋没した五輪塔群の包含層は、表土下一、二メートル。五層の砂石層があり五度の土石流にみまわれたことが明らかとなった。

以上のことから、慶長三年の項の別府村、久光村などの村々は、土石流の下に埋没している可能性が高いといえよう。

ここで再び『別府村絵図』を見てみよう。この絵図を整理作成したのが第五図である。図の中央を南北にはしる道路は小倉街道である。現在の南町、本町、北町から西法寺の前を通り、近鉄デパートの下を通って行合町から野口元町、野口中通、西野口を通る古道である。この街道は、明らかに海岸の古い砂丘の上に造られている。道路の両側は畑地で、その間にわずかに人家が点在する。砂丘の西側は水田、東側も水田と沼地。その東は松原と海岸の砂丘である。海岸の松原の南に近く住吉神社と八幡朝見神社の御幸場が書かれている。これが現在の松原公園である。

街道が北上し、やがて西北に曲る地点から、海岸へ抜

ける道がとおり、その松林のなかに一区を劃して海門寺が書かれ、そばに北上川が流れている。

小倉街道に沿って別府村をのせた砂丘の南部も田で、そのむこうに朝見川が流れ、街道は、この川を渡っている。砂丘は南から永石川、流川、北上川で分断されている。このことから、かつては永石川は朝見川に流入した可能性がある。

この砂丘を、流川以南、流川と北上川の間、北上川より以北と三つの砂丘塊として考えれば、南から大久光、小久光、無名の島と、その形状までが『仙玉絵図』に書かれたものと類似している。『仙玉絵図』をみても浜脇と砂丘の着根部を貫流した朝見川、ほゞ中央を貫いて流れ出した流川。堆積し口を塞がれた潟湖の北を貫いて流れ出した北上川。延享五年頃には水田化され、数度の水害で高くはなっているが、湿田で潟湖の面影を残す水田などが、久光村当時の姿を浮き彫りにしている。

四、おわりに

久光村が、なぜ久光島と呼ばれたのであろうか。柳田国男氏によれば、古来、平野のなかにポツンと独立した盛り上った丘、山を島とよんでいるという（島の人生等による）。また田代脩氏は和歌山県那賀郡桃山田の高野山領荒川庄で、紀川の旧河道の自然堤防をふくむ微高地に「島」とよばれる地名が多いことをあげている（高野山権力と農民の動向）。このようなことから、大分平野の碇島も好例であろうし、実相寺山も、かつて石垣村の人々から単に「島」とよばれていたという。

このような例から考えると、小倉街道の通っている砂丘は、明らかに畠地（微高地）であり「島」とよぶにふさわしい。このことから久光村は陸化しても「久光島」と呼ばれた可能性が少なくない。

それでは、久光村が存在していた頃の別府村は、どこにあったのであろうか。小倉街道の通っている砂丘の西側に、さらに一つの砂丘が存在した痕跡がある、それは第五図の野口原に登る小倉街道に両側の町並であり、前にも述べた堺川天神の上下に堺川原の南に沿って広がる街並である。この街並は『別府村絵図』では、町並みの上に白点が打たけ河原となっているが、町並みがあった

ことは明らかだ。また別府駅裏通りに面した別府公園東角の埋没した五輪塔群は、当時の別府村がこゝにあったことを証明する手がかりではなかろうか。

度重なる土石流で埋没した中世の別府は、これから解明していかなければならない問題であるが、その解明の糸口となるのは「久光島」の研究ではなかろうか。

ポスポール（燐）

―えせ役人事件―

入江秀利

万延元年（一八六〇）二月、大分郡乙津村の後藤今四郎宅で、「西洋砲術製薬其外御教授方江戸御役人」福原麟之助が、長崎奉行所同心に逮捕された。さらに、同心は、別府村で小間物商宮む日野屋源八をも捕縛して、長崎へ連行した。源八は吟味の末帰国を許されたが、入れ替わりに、倅孫六と宗十郎などの関係者が、長崎奉行所に召喚された。

この事件は、厳しい吟味の結果、別府村の関係者全員が『急度叱り』張本人の福原麟之助は天草へ遠島となって一件が落着した。

当時の国情は、六年前に開国という一大転機をむかえ、開国派と攘夷派の国論が沸騰して、騒然としていた。万延元年といえば、大老井伊掃部頭が桜田門外で水戸浪士に襲われ相果てた年である。

諸藩の藩士は、内に幕藩体制終末期の世情不安と、加えて外憂という極度の緊張感から、西洋の新しい火器やその操法の修得に大きな関心をもっていた。レミントン銃などの元込め銃の撃ち方、大砲の操作など、銃火器の操術はもとより、炸裂力の強い火薬の研究もまた盛んであった。なかでも、自然科学の妙味を盛り込んだ舎密術